

明治村に移築 遺構24件



一九三三年九月の関東大震災から今年で百年となる。明治時代の建造物を保存・展示する「博物館明治村」（愛知県大田守）には、大震災を（まじけりた）ものが数多く移築されている。名古屋大の武村雅之特任教授（地震学）と歩き、古い建物が語りかける敷地について考えた。（横井武昭）

▼24▲ 関東大震災（愛知県大田守）

二十世紀の巨匠とされる米国の建築家ラック・ロイドへ、「入居後とほぼ同一の建物」が設計された帝国ホテルの移築が、震災が起きた九月一日に開業した。当時の中央支店が明治村にある。「れんがや大谷石を使った鉄筋コンクリートで堅固だった」と武村さん。

ホテルは地震後、各国外使館や企業、報道関係などの臨時事務所として使われた。日本赤十字社から援助物資を受け、窓口に設けた。「建物が壊れる被災地全体の役に立つ。地震や火災に強い建物をつくるのは非常に重要ですね」と話した。

次は鉄橋の「隅田川新大橋」。二万八千トンと当時の最重量を誇る。隅田川の橋は多くが震災の火災で焼け落ちた。新大橋は鋼製で燃えず、避難人々が大団円で運動会をした。たが財源を、震災が起きてから川に捨てられたゴミを回収し、たてたという。そのままだと建物に火が付いてしまふ。人々の反響も買ったろうが、機転を利かせた。好むを準備する。

日本赤十字社中央病院棟も震災を経験した。巨石は、このうち十四件は関東大震災の被災地にあったものだ。「地震では、その場に合った適切な新や事前の準備が必要になる。それを建物で教えるべし。実感できる」と武村さん。中野さん「建物から学び、よい良い明日を生きるヒントになれば」と話した。



帝国ホテル中央支店 武村雅之特任教授と主任学芸員の中野裕子さんが、いずれも愛知県大田守市の博物館明治村で



隅田川新大橋 博物館明治村提供

日本赤十字社 中央病院棟



アクセス 名鉄大田駅からバスで約20分。車では中央自動車道「小牧東IC」から約5km

村内の建造物1/3 被災

関東大震災の研究を十年続けている武村さん、地震学や明治村の出入りには十二年前だった。東京から名古屋へ単身赴任し、妻と初めて観光で訪れたとき、見覚えのある建物をいくつか、「大震災で多くの人を救った有名な隅田川新大橋を見て、びっくりしたんです。」と口にした。

武村さんは、経済学が最先端でなく東京ではなじみない文化事業が愛知にある。感動した。そのを機に、明治村へ来た。明治村は、建築家を初め、館長の谷口吉義氏や古屋敷通商会長土川元兵衛氏、資料館へ、一〇一八年に長期に取組まれている。明治村が語る歴史を、（風媒社）保存のために協賛して創

- 近衛局本部付属舎
赤坂離宮正門哨舎
学習院長官舎
西郷従道邸
森鷗外・夏目漱石住宅
東京盲学校車寄
二重橋飾電燈
鉄道新橋工場
北里研究所本館・医学館
幸田露伴住宅「蝸牛庵」
品川燈台
宗教大学車寄
日本赤十字社中央病院病棟
六郷川鉄橋
鉄道新橋工場（機械館）
汐留火力発電所煙突基礎
工部省品川硝子製造所
本郷富士床
隅田川新大橋
川崎銀行本店
皇居正門石橋飾電燈
内閣文庫
東京駅警備調査派出所
帝国ホテル中央支店

東日本大震災 12年

中日新聞社や河北新報社など全国の地方紙、放送局でつくる「311メディアネット」は2月11日、全国13カ所をオンラインで結び、防災ワークショップ「むすび塾」を開いた。災害の伝承や防災に取り組みむ10～20代の若者が備えについて意見を交わした。

備えの意識薄れ危機感

宮城県気仙沼市にある東日本大震災遺構の旧校舎で、語り部の熊谷樹さん（20）はたくさん犠牲者が出たことを説明。「この場所で行ったことを忘れないように、伝えることが私たちの使命だ」と話した。

意見交換で北海道大学院修士課程1年の今井俊輔さん（23）は、将来の千島海溝巨大地震による全域停電を懸念。「真冬は凍死者が多発する可能性がある。家ではカセットガスが使えない簡易暖房を準備している」と紹介した。

同志社大3年の安立電清さん（22）は全国で相次ぐ水害への備えの重要性を強調。「大切な人を守るという本能に訴えることが必要」などと指摘した。

「4歳で見た阪神・淡路大震災のテレビ番組に衝撃を受けた」と言うのは神戸学院大3年の稲澤遥樹さん（21）。「阪神から時間がたち、備えの意識が薄れている」と明かした。

福井大4年の都築大輔さん（22）



むすび塾 @311メディアネット ■ 若者がワークショップ

名古屋市立大付鳳東部医療センター看護師 後藤薬さん（23）

看護学生だった2021年に、豪雨災害に遭った佐賀県にボランティアで行き、住民の健康管理に関わった。支援物資で届く食品は量が多く、高血圧につながっていた。野菜やフルーツを求めた声が多く、ニーズを把握して支援できればと思うようになった。

むすび塾に参加して、地域に応じた備えの工夫が大切だと気づいた。皆、防災に関心を持ってもらおうと工夫しながら活動していて学ぶことが多かった。私も更に中高生向けの防災イベントを地域で企画している。楽しみながら知らないうちに備える力を身に付けられる機会にしたい。（横井武昭）

立大1年の石川紗羅さん（19）。「日頃から女性や性的マイノリティーが決定権のある場にいることが大事」と語った。

宮崎県立佐土原高2年の中田翔さん（17）は2022年の台風14号の教訓を説明。「自分は大丈夫だと思っただけで避難しない人がいた。強い正

常性バイアスを何とかしなければならぬ」と訴えた。岩手県釜石市出身の静岡大3年の高橋奈那さん（21）は、静岡大震災伝承活動をしている。「震災を知らない世代が、未来に起きることではなく、過去の出来事と捉えていることに危機感を覚える」と話した。